待ち時間に安らぎと心地よさを

—ホスピタルアートに込めた思い—

2025年5月、東大病院ホスピタルアート導入プロジェクトの一環として、外来診療棟の1階と2階に新たなアート作品を設置しました。東大病院周辺の植物（薬草）を使用した草木染めで、アーティストの山本愛子さんの作品です。アートによって院内に「自然」を取り込むことで、来院される皆様に安らぎと心地よさを提供したいと考えています。

■ プロジェクト始動

プロジェクトは2024年春に始動しました。近年、いきいきとした療養環境を実現するために医療・福祉施設において芸術を導入する機運が高まっています。当院でもホスピタルアートを導入することで患者さんの療養環境の向上はもちろん、アート導入過程における多職種スタッフ間のコミュニケーションやスタッフのモチベーションのアップなどにつなげたいという考えから、ワーキンググループを立ち上げ、検討を重ねていきました。ワーキンググループには、11の職種と学生を合わせ54名ものメンバーが参加しました。

■ ホスピタルアートのコンセプト

まずはコンセプトの検討から始めました。当院を訪れる人や働く人にどんな体験を提供したいか、なぜ当院でその体験が大切なのかという点を軸に、様々な意見があがりました。そして、「自然」「癒し」「心地よさ」「グリーン」「東大らしさ」「品格」というコンセプトを決めました。

一般的にホスピタルアートではワークショップなど参加型の企画もよく行われますが、参加できる人数が限られてしまうことや、この先当院を訪れる多くの方に癒し・心地よさを提供することが大切であるとの考えから、今回は作品の完成度・クオリティを優先し、アーティストに作品を依頼することにしました。また、作品の制作過程に参加できなくても、制作過程を紹介することや、作品に東大らしさを取り入れてもらうことなど、作品に親しみを感じてもらう方法を探しました。

■ 山本愛子さんに作品を依頼

コンセプトと照らし合わせながら議論を重ね、アートフロントギャラリーから推薦していただいた複数のアーティストの中から、自然環境と人間の関係性をテーマに主に染色技術を用いた作品を制作している山本愛子さんに作品を依頼しました。作品は草木染めで、当院がある東京大学本郷キャンパス内の植物の中でも、古くから薬草として親しまれてきた葛（クズ）の葉と椿（ツバキ）の枝葉を採集してつくった植物染料を使用しています。緑に恵まれた当院の環境から生まれた作品《内景》は、染色のにじみや揺らぎといった境界のないやわらかな世界を感じることができる作品です。

制作プロセス

1

植物採集

東京大学敷地内（東大病院周辺）を歩き、葛の葉と椿の枝葉を採集します。どちらも薬草としての歴史を持つ植物です。

2

染料作り

採集した植物を煮出して染液をつくります。自然の色がゆっくりと水ににじみ出て、淡くやさしい色彩が現れます。

3

草木染め

綿布を90℃の染液に浸して染める「浸染（しんぜん）」技法を用いて植物の色を布にしみ込ませます。

4

定着処理

染めた布が色落ちしにくいようアルミ媒染剤を使って色を布に定着させます。定着後、③の工程を繰り返すことで、色に深みを出すことができます。

5

刷毛染め

植物染料の上から、類似した色味の顔料を「刷毛染め（はけぞめ）」技法を用いて重ねます。色褪せを補うと同時に、にじみや揺らぎの表情を引き出しています。最後に熱処理定着をして完成です。

内景
NAIKEI − Inner Landscape

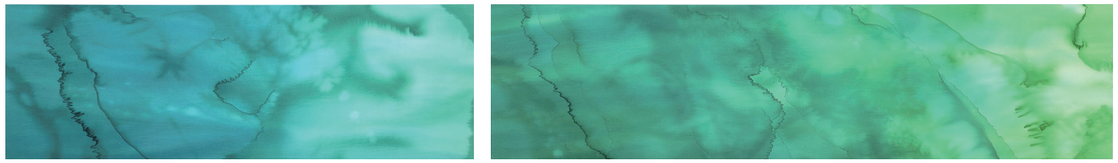
作:山本愛子

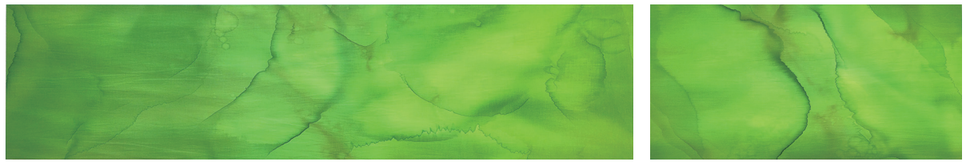
2025

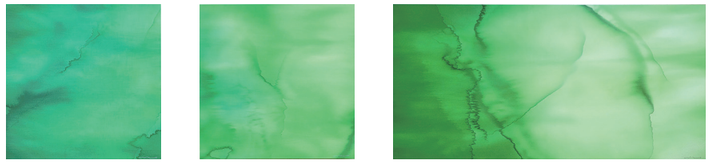
東京大学本郷キャンパス敷地内の葛(クズ)の葉、椿(ツバキ)の枝葉、綿布、アルミ媒染液、顔料、パネル

使用した植物の効能

葛（クズ）　…　発汗･解熱･肩こりの緩和など、身体の巡りを整える薬草
椿（ツバキ）…　抗炎症･保湿作用があり、肌や髪を守る薬草

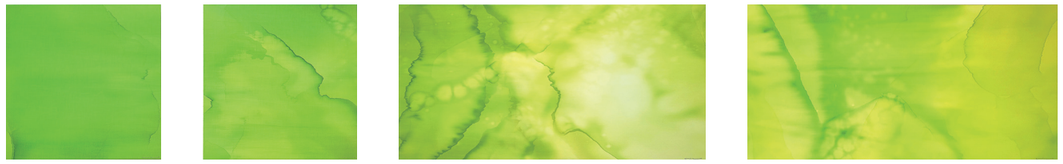






2F

1F



アーティストプロフィール

山本愛子
（やまもと･あいこ）

東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了。
自然環境と人間の関係性をテーマに、主に染色技術を用いた作品を制作する。アジアを中心に国内外でフィールドリサーチや滞在制作を行い、土地に根ざした自然の記憶と人の営みが交差する痕跡や風景を可視化することを試みる。
主な展覧会に、グループ展「往古来今／見えない泉をさまよいさがす」（横須賀美術館／神奈川 2024）、個展「BankART Under 35」（BankART KAIKO/神奈川 2021）など。

アーティストの言葉

作品《内景》の制作のはじまりは、東大病院がどのような環境にあるのかを知りたいという関心から、敷地内を歩いてみることでした。すると周囲には多くの植物が息づいていて、自然豊かでやわらかな空気が流れている場所であることに気づかされました。この空気感を作品にも表現したいと感じ、薬草としての歴史と効能を持つ葛の葉と椿の枝葉を採集し、植物染料をつくりました。これらは、内服･外用の薬草として古くから親しまれてきた植物です。効能を秘めたその色を布に染め、さらに同系色の顔料を重ねることで、染色のにじみや揺らぎといった境界のないやわらかな世界を深めていきました。

待合室で椅子に座ると、目の前の壁にこの作品が飾られています。植物の内なる色をいただくことで生まれた《内景》に、ぜひ自分の感覚をゆだねてみてください。作品を感じるひとときが、呼吸を整え、心をゆるめ、待ち時間が少しでも穏やかで豊かなものになればと願っています。